

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 17

2010.10.20 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 紅緑編「滑稽俳句集」はまだ「夏の部」ですが、猛暑と言われた今年の夏もやっと朝夕涼しくなって、自然も秋の様相を呈して来た様ですよ。今月もご指導何卒よろしくお願い致します。

会長 > やっと秋本番ですね
★竜田姫居座る夏を押しよける
というところでしょうか。
本題に参りましょうか。

高橋 > 本日は「夏の部、動物」の句・・・前回の蚊、蚤等の害虫に続いて季語は「蠅」ですよ。

やはり身近の生き物は昔の人も面白くて詠み易い様ですね。たくさんの句が並んでいます。

- ☆ 剃立のあたまや蠅のなりぶもの 蘭中
- ☆ 摺小木で蠅を追けりとろろ汁 愚信
- ☆ あつまれば一度に憎しものゝ蠅 乙二
- ☆ 隠れ家は蠅も小勢で暮しけり 一茶
- ☆ 御首に蠅が三匹とをまつた 一茶
- ☆ 世がよくばもひとつとまれ飯の蠅 一茶
- ☆ やれうつな蠅が手をする足をする 一茶
- ☆ 蠅一つ打てば南無阿彌陀佛かな 一茶
- ☆ むにやむにやと眠り入るなり顔に蠅 紅緑

・・・そう言えば、私の子供の頃にもこれ程でなくても蠅がいましたね。小さな魚屋さんとか、八百屋さんには天井から蠅取紙が釣り下げられて・・・

私にも子どもの頃最後の句のような経験が・・・
蠅に黴菌のキスされたみたいで気持ち悪いものですが、「ひょっとしてこの蠅、魔法を懸けられた王子様かも・・・」と、子ども心には蠅にも夢が・・・！（笑）

ところで、やはり一茶の句が多いですね。
会長には「蠅の滑稽句」を本日の最後にお問い合わせする事

にして、「滑稽俳句集」のこれらの句御解説下さいね。

会長 > ☆ **剃立のあたまや蠅のなりぶもの** 蘭中

蠅が剃立てのあたまをうろついてこそばゆい。そういう風景です。現代人が味わうことのできない、おかしさが記録されていますね。

☆ **摺小木で蠅を追けりとろろ汁** 愚信

とろろ汁をつくるのに蠅が搦鉢にたかるとです。それを追い払うのにすりこぎを使う。追い払ってもすぐ舞い戻る・・・。

☆ **あつまれば一度に憎しものゝ蠅** 乙二

一匹より群ている方が憎い。憎さ百倍という意味ですね。

☆ **隠れ家は蠅も小勢で暮しけり** 一茶

一茶にとって柏原の家は隠れ家のようにこじんまりとしたものだったようです。蠅の家族も同じだなあという共感ですね。

☆ **御首に蠅が三匹とをまつた** 一茶

御首というからには 地位の高いお方。「とをまつた」は「とまった」ということです。しかし、三匹に「待った」をかけているようにも読めないわけではない。

☆ **世がよくばもひとつとまれ飯の蠅** 一茶

一茶の優しさですね。今は貧乏だからできないが世の中がよくなれば もっとたからせてあげるといふ・・・。

☆ **やれうつな蠅が手をする足をする** 一茶

蠅を打つためらいですね。 蠅が「命乞い」をしていると見たわけですね。

☆ **蠅一つ打てば南無阿彌陀佛かな** 一茶

蠅を打つての後悔です。罪悪感ですね。

☆ **むにやむにやと眠り入るなり顔に蠅** 紅緑

顔にたかる蠅を追い払っているうちに眠ってしまうのですが、それを見計らって蠅が舞いもどるということです。こうしてみると、昔の人は日常をためらうことなく描いていますね。

高橋 > そうですね。素直に日常生活を・・・
しかもどこかに愛情を持って・・・

次の季語は身近な虫の中でも、心慰めてくれる魅惑的な虫「蛍」ですよ。

会長も蛍の句をたくさんお詠みですが、独断と偏見で勝手に選ばせて戴いた二句御紹介させて下さいね。

★ **ほうたるを這はせて爪に灯を点す** 健

★ **ほうたるの恋や箒ではたかるる** 健

うわー！ひどい！（笑）紅緑の滑稽俳句集に戻りま〜す！たくさん有りますが、ご説明下さいね。

☆ **大将は負はれて出るや蛍狩** 也有

☆ **奪合ふて弱らかしたる蛍哉** 也有

☆ **蚊屋の中に蛍放してアゝ楽や** 蕪村

☆ **わん白や縛られながら呼ぶ蛍** 一茶

☆ **提燈にあたりて黒き蛍かな** 大江丸

☆ **拳から拳で貰ふ蛍かな** 紅緑

会長 > 拙句から解説しましょう。

★ **ほうたるを這はせて爪に灯を点す** 健

「爪に灯を点す」は貧しいということです。「蛍を手にとらせ」というのは風流です。

風流なことをしていただけでは金儲けが出来ない。したがって爪に灯を点す暮らしだということです。

次に、

★ **ほうたるの恋や箒ではたかるる** 健

交尾している蛍は敏捷には動きませんから捕まり易いのです。私が子どもの頃には竹箒を使いました。
それでは紅緑の滑稽俳句集。

☆ **大将は負はれて出るや蛍狩** 也有

餓鬼大将・・・蛍狩の隊長ですな。

☆ **奪合ふて弱らかしたる蛍哉** 也有

「取り合って」と読むべきでしょうね。
結局は死なせる・・・良くあることです。

☆ **蚊屋の中に蛍放してアゝ楽や** 蕪村

蚊帳の中に蚊を放して「楽」とおどけていますね。蛍狩りにゆかなくてもいい。これがホントの風流じゃわいとばかりに喜んでいきますね。蕪村は子どもみたいに無邪気な人だったということがわかります。

☆ **わん白や縛られながら呼ぶ蛍** 一茶

これも楽しい句です。悪戯をして懲らしめられて縛りあげられている。その腕白が「蛍来い」の歌を歌っている。

☆ **提燈にあたりて黒き蛍かな** 大江丸

提燈の方が光が強いですからね。蛍は黒く見えるだけ。という当たり前のことに気が付いた。
しかし、なんともいえぬ哀しみがあります。

☆ **拳から拳で貰ふ蛍かな** 紅緑

これは、今でもありそうな風景ですね。句としては、景のなかに蛍を見せていません。拳だけが見えています。蛍は読者の頭の中に潜んでいます。

高橋 > 有難うございました。次の季語は、

★ **蟬殻をぬぎつつあればセミヌード** 健

★ 頭を低くして蟬時雨くぐりけり 健

★ 自らを死体遺棄して油蟬 健

など、会長が名滑稽句を次々お詠みになっ
ていらしゃる「蟬」ですよ。

でもたくさんの句が詠まれた蚊、蚤、
蠅と違って「蟬」は「滑稽集」には一茶のこの一句のみです。

☆ 初蟬のうきを見ん見ん見みん哉 一茶

会長 > 初蟬のうきを見ん見ん見みん哉 一茶

ミンミンミンカナ 蟬の鳴き声を忠
実に表現しています。「うき」は「憂
き」でしょう。ミンミンミン・・この
「軽さ」この自在こそ一茶の句の真骨頂
でしょう。

高橋 > 成る程、一茶は軽く面白く詠みながら、
きちんと句のポイントを押さえているの
ですね。

次の季語は「毛虫」です。

女性の悲鳴が聞こえて来そうですが・・

☆ 毛虫這ふ背中をかしや郭○陀 几董

☆ 桑畑に喰ひつぶしの毛虫哉 逸名

☆ 梶原に又の名ありて毛虫哉 紅緑

広辞苑によると、「梶原」は梶原景時が歌舞伎で意地の悪い人に描かれていることから「意地の悪い者の意」また「ゲジゲジの異名」とありますよ。

芭蕉も一句詠んでいるようですが、当時は「梶原」と言われたら「毛虫のような奴」という意になる様ですね。

会長 > ☆ 毛虫這ふ背中をかしや郭○陀 几董

古い書物なので○の部分が読みとれませんが「たく」と読むようです。
これは意味不明です。パスしましょう。

☆ 桑畑に喰ひつぶしの毛虫哉 逸名

毛虫はお蚕さんに良く似ていますが糸を吐いたりしません。桑の葉を食べるだけ

という「ケシカラン」存在。それを「喰ひつぶし」と槍玉にあげたわけですね。

☆ **梶原に又の名ありて毛虫哉** 紅緑

これは調べて頂いた様に「嫌われ者」の異名ですね。露骨にも梶原は毛虫だと。この時代の俳人は思ったことがそのまま句になっていますね。

高橋 > 思ったことをそのまま俳句に・・・面白いですね。次の季語は「灯取虫」・・・灯に集まって来る虫ですね。

☆ **灯を取に米搗虫も参るなり** ○山

会長 > 米搗虫（コメツキムシ）は体調一センチメートル。体を抑えると頭を振って人が米を搗くのに似る。そういう昆虫がいるのです。朽ちた木にすんでクワガタの幼虫を捕食するらしい。

この句は「灯」の明るさが見えます。あの米搗虫も来るほどの灯なんですから。

高橋 > 次の季語は・・・会長も

★ **蝸牛剥がされまいとしがみつく** 健

とお詠みですが、子どもの頃よく遊んだ「蝸牛」です。沢山の句が並んでいますよ。

ご解説お願いしてよいですか？

- ☆ **猫の子に嗅がれて居るや蝸牛** 才丸
- ☆ **繪簾や繪かと思へば蝸牛** 如行
- ☆ **角出して這はでやみけり蝸牛** 太祇
- ☆ **折あしと角をさめけり蝸牛** 太祇
- ☆ **竹の子に脱捨られて蝸牛** 也有
- ☆ **こもり居て雨うたがふや蝸牛** 蕪村
- ☆ **なめくじら日も戀のゆがみ文字** 大江丸
- ☆ **蝸牛やみんな同じき背の紋** 紅緑

会長 > ☆ **猫の子に嗅がれて居るや蝸牛** 才丸

蝸牛はなまぐさい臭いがしますね。それ

を猫の子が嗅ぐ。動きが鈍く音も立てない蝸牛にも「臭い」という弱点があったのです。
それを子猫ふぜいに見やぶられたという可笑しさですね。

☆ **繪簾や繪かと思へば蝸牛** 如行

繪簾の繪かと思ったらホンモノの蝸牛だったという可笑しさです。裏切られた体験を描いた。体験そのものに可笑しさがある。という句ですね。

☆ **角出して這はでやみけり蝸牛** 太祇

角を出したが這うことをしないで終ってしまったと言う句です。
これは蝸牛を子どもたちが取り巻いて囃し立てているわけですね。
つのだせ やりだせ 角は出したがじっとして動かないまま。
これも「蝸牛はゆっくり動くもの」という観念を裏切られたところに可笑しさがあります。

☆ **折あしと角をさめけり蝸牛** 太祇

タイミングが悪い・・・と角を引っ込めました。
という句ですね。

☆ **竹の子に脱捨られて蝸牛** 也有

竹の子の皮にくっついていていた蝸牛。竹の子が成長して「竹皮を脱ぐ」ことになります。
そのとき皮にくっついていていた蝸牛は「脱ぎ捨てられる」わけですね。

☆ **こもり居て雨うたがふや蝸牛** 蕪村

降りそうで降らない。蝸牛は「降らない」と思っているに違いない。という句です。

☆ **なめくじら巳も戀のゆがみ文字** 大江丸

なめくじの這った跡は光ってみえますね。くねくねとして「ゆがみ文字」だというわけです。ゆがみ文字はひらがなの「く」の字です。

☆ 蝸牛やみんな同じき背の紋 紅緑

「ででむし」と読みます。「背な」の渦巻きが同じだということですね。

高橋 > 腕白だった会長の子供時代を彷彿とさせられるようなご解説有難うございます。

次の季語は「臺」。臺は蟾蜍(ひきがえる)のことですね。

★ 蟾蜍字も難しき面構へ 健

とお詠みですが、これも会長には、いろいろ思い出がお有りになりそうですね。

次の一茶の句は、狂言の台詞をそのまま引用したということでしょうか？

☆ 罷り出たるは此藪の臺にて候 一茶

☆ 臺は蛙の従兄弟にこそ 紅緑

会長 > ☆ 罷り出たるは此藪の臺にて候 一茶

謹厳実直難しい面構えの臺の格好からして
狂言そっくりで、一茶はうまいこと
言いましたね。

☆ 臺は蛙の従兄弟にこそ 紅緑

臺は蛙の従兄弟なのに従兄弟に見せない
という否定的印象をひっくり返して句
にしています。「こそあれど」の「あれ
ど」を隠していますね。

高橋 > それでは、本日はこれまでに。

身近な生き物に、ますます愛情が湧いて来るような面白い御解説、御指導有難うございました。

今後の作句活動に活かして行けたらと思いますが・・・最後に、いつものように滑稽俳句協会会長に今日の季語で「平成の滑稽句」をお願いして本日も笑いの内に

「インタビュー」を終わらせて戴きたいと思います。

会長 > はい 了解です。

- ★ 今の人横浜銀蠅など知らず 健
- ★ 蠅帳の瀕死となりし季語辞典 健
- ★ 日本の蠅は絶滅危惧種かも 健
- ★ はいはいの幼子の顔八エ八エ八エ 健
- ★ ウィンクが得意技なりかたつむり 健
- ★ 両つむりなり口づけをさるとき 健
- ★ ほうたるの語源は火照るあちちち 健
- ★ 恋蚩今風に言えばラブホテル 健
- ★ 歯ブラシにするや毛虫に柄をすげて 健
- ★ 太眉に毛虫をのせて二重眉 健
- ★ 墓口にその名を残しひきがえる 健

(2010年11月号)
